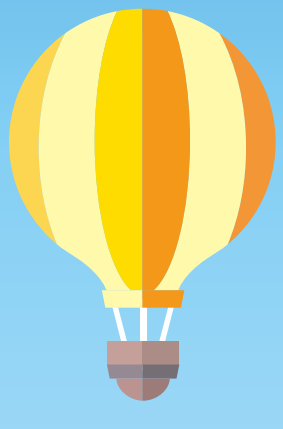
成育だより

2025
Vol.41
冬号

Contents

コンプライアンス室から／新任のご挨拶
NEWS／ふれあい通信
センターの取り組み／診療科のご案内
Information／研究開発のトピックス



国立成育医療研究センター

コンプライアンス室から

コンプライアンス室長の加藤木 玉江（かとうぎたまえ）と申します。一般企業でコンプライアンス室を担当した経験を持つ相談補助員とともに、相談・通報に対応しています。

コンプライアンスが軽視された職場環境は職員の労働意欲低下や離職を招くばかりではなく、場合によっては社会の信用失墜につながることもあります。相談しやすくするため、毎月2回定期的に「コンプライアンス相談案内」を配信し、以下のメッセージを伝えています。

①誰にも相談できずに問題を抱えている方、抱えている問題の対処に困っている方、どんな小さな問題でも遠慮なくご相談ください。一緒に解決方法を考えましょう。もしみなさんの抱えている問題が、当センターの信頼に関わる重大な問題であれば、当センターが組織として直ちに対処する必要があります。その意味ではどんな相談でも、大切な相談です。

②通報・相談者のプライバシーの保護を最優先に対応いたします。相談者の望まない事実確認は原則行いません。ただし、公益性を有し、当センターにとって重要な事案の場合は事実確認を行うことがあります。

③相談したことを理由に不利益な処遇を受けるなどの報復的な措置は行われません。安心してご相談ください。

「相談してよかった」と思われるよう励んでまいります。

新任のご挨拶

遺伝診療センター長　黒澤 健司

これまで小児病院の遺伝科で診療してきましたが、2024年4月より遺伝診療センター長に着任しました。

2022年に組織された遺伝診療センターは2年が経過し、その活動が注目されています。目標は全ゲノムデータを用いた医療の実装です。国レベルでは「全ゲノム解析等実行計画」が進行しています。当センターは研究所が併設されており、その実現は十分可能で、プロトタイプを提示する責任があります。最先端のデータ処理機能を駆使して、希少難病の病態が解明され、治療の開発が進むことは大きな目標の一つです。しかし、いっぽうで多くの遺伝性の希少疾患は未解明です。小児病院に入院する患者の6割は遺伝性疾患であり、この傾向は半世紀前から変化していません。これは遺伝性疾患の難しさを表しています。ゲノムシーケンサーとコンピューターから出されてくるゲノム情報をその人の人生に照らして、正しく伝え、個人の医療や健康に役立てていただくことへの支援も遺伝医療の重要な役割と考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

心臓血管外科診療部長　平田 康隆

2024年9月1日より心臓血管外科診療部長に着任いたしました平田 康隆（ひらた やすたか）と申します。1996年に東京大学を卒業、４年間一般外科で研修後、2000年から成人、小児の心臓外科の修練を開始しました。

2005年に渡米し、NYのコロンビア大学に小児心臓外科部門の臨床講師として赴任。先天性心疾患手術1,000例以上に関わり、術者として40例以上の小児心臓移植を執刀するなど、非常に貴重な経験をつむことができました。2009年に帰国し当センターに赴任、2013年4月より東大病院心臓外科に小児心臓外科の責任者として赴任しました。2024年8月までの約11年間で約1,500例の手術を行い、左心低形成症候群、完全大血管転位、大動脈縮窄・離断、房室錯位症候群などを含む困難な手術を非常に良好な成績で行ってきました。また、コロンビア大学での心臓移植の経験から、日本における小児の心臓移植、補助人工心臓の中心となる役割を果たしてきました。センターでは、あらゆる先天性心疾患、小児心疾患の手術で日本をリードできるよう頑張りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

NEWS ニュース

第52回 国立病院臨床検査技師協会関東信越支部学会 学術奨励賞を受賞

臨床検査技師　竹内 優希

2024年9月7日に開催された第52回国立病院臨床検査技師協会関東信越支部学会で、「GMP3原則に基づいた輸血細胞療法室の品質管理構築を目指して」の演題を発表し、学術奨励賞を受賞しました。発表の内容は、医師の働き方改革も視野に入れ、輸血細胞療法室の細胞調製業務を医師から臨床検査部へ移行するにあたり、臨床検査技師による質の高い業務運用と取り組みについて取りまとめました。このような名誉ある賞を受賞できたのも、小野寺臨床検査部統括部長、坂口輸血細胞療法室長をはじめ、技師の諸先輩方にご指導・ご協力いただいた結果で、心より感謝しています。これからも医師の働き方改革を踏まえたタスクシフト/シェアに貢献できるよう、積極的に細胞調製業務へ参加していきたいと思います。

優秀演題セッション特別賞、Best Presentation Award 最優秀演題賞を受賞

手術・集中治療部　医療工学室　芝田 正道

日本集中治療医学会第8回関東甲信越支部学術集会で「優秀演題セッション特別賞」、第4回関東甲信越臨床工学会 /第31回東京都臨床工学会で「Best Presentation Award 最優秀演題賞」を受賞しました。

今回受賞した演題は、「物体検出 AI(YOLO ver8)による機械学習を用いた人工呼吸器回路の接続ミスを判別するモデルの作成および汎用化の検討」です。人工呼吸器の吸気と呼気の逆接続をAIが判別するモデルで、Pythonのlibralyを活用してwebアプリを作成し、個々のスマートフォンで判別モデルを動作させることが可能です。またPCの内蔵カメラを利用することでリアルタイムに判別モデルを利用することもできます。現在は回路だけでなく、人工呼吸器使用中の蒸留水残量の有無や加温加湿器の電源ON/OFFの判別も可能で、アラートや音声での注意喚起もしてくれます。

実践での活用はこれからとなりますが、今後も他分野への応用も含めて研究を続け、医療安全に寄与できるように医療工学室として精進してまいりますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いします。

日本小児理学療法学会第11回学術大会 優秀賞を受賞

理学療法士　峯 耕太郎

日本小児理学療法学会の第11回学術大会が2024年11月2日～3日に福島で開催されました。私は「極早産・極低出生体重児における慢性肺疾患の重症度と粗大運動発達の関連」というテーマで研究発表を行い、優秀賞を受賞しました。これまでに、慢性肺疾患を合併すると幼児期の発達面や学童期の知能面に悪影響をもたらすことが多く報告されています。しかし、より早期の乳児期への影響はまだ明確でない部分がありました。本研究では乳児期の運動面の発達に焦点をあて、重症の慢性肺疾患を合併すると乳児期早期の首がすわる段階から発達の遅れが見られるということを明らかにしました。この結果は早期からの細やかな診察や発達支援の必要性につながるものと考えられます。本研究に携わってくださった皆さまに感謝し、今後も日々の臨床をしっかりと形に残していけるよう取り組んでいきます。

ふれあい通信

リハビリテーション科におけるパラスポーツへの取り組み

リハビリテーション科診療部長　上出 杏里

この夏開催されたパリ2024パラリンピック競技大会に、日本代表選手団本部メディカルチームの一員として帯同してきました。パリ北部サン・ドニにある選手村内に約3週間滞在し、選手・役員総勢330名の健康管理、怪我や体調不良などの対応に尽力しました。世界各国のパラアスリート、スタッフらが一同に会する選手村での生活は、言葉や文化、障害の有無といった多様性を認め合い、共に生きていく社会の実現が可能であることに気づかされました。

こうした経験をもとに、リハビリテーション科ではアスリートを対象としたパラスポーツ外来だけでなく、さまざまなお子さんの発達支援、社会参加支援の一つとしてスポーツ・パラスポーツへの参加を推奨する取り組みを行っています。

(公財)世田谷区スポーツ振興財団との連携も4年目を迎え、2024年6月8日には大蔵第二運動場体育館にて第一回成育スポーツまつりを開催しました。当日は88名の参加者の皆さんと、さまざまなスポーツ・パラスポーツ、競技用車椅子での体験を通してカラダを動かす楽しさを実感していただきました。また実際に活躍されているパラバドミントン、ボッチャの選手との交流を通してパラスポーツへの親しみを深めることもできました。次回は、入院中のお子さんたちと一緒に参加できるパラスポーツイベントを2月に予定していますので是非楽しみにしていてください。

12月9日 おりがみツリー点灯式を行いました

「おりがみツリー」とは折ったおりがみを使って高さ約5～6メートルにもなるクリスマスツリーを作るという2012年から始まった企画です。

入院中のお子さんや医療従事者など子どもに関わる方(センター内外)の手で折られたおりがみ17,452枚を使用し、高さ約6mのクリスマスツリーが12月初旬に完成しました。沢山の想いが詰まったおりがみツリーはロビーに飾られ、12月9日に点灯式を開催いたしました。

五十嵐理事長の開会の挨拶のあと、おりがみツリーが点灯され、式にご参加いただいた皆さまからの歓声が上がりました。

医師らによるミニコンサートをはじめ、セント・メリーズ・インターナショナル・スクールのバーシティアンサンブルの皆さまに歌声を披露していただき、華やかで素敵な式典になりました。

ツリーは、2025年1月末まで飾られますので、ひと目でもご覧になっていただければ幸いです。

11月5日 ウルトラキッズプロジェクトが開催されました

全国の病院で難病の治療を続ける子どもたちに向けて、生配信でウルトラヒーローショーなどを届けるオンラインイベント「ウルトラキッズプロジェクト」（主催：ウルトラマン基金）が2024年11月5日(火)に開催されました。全国の小児施設とオンラインでつながり、参加者たちは一緒にイベントを楽しみました。

今回の舞台は当センター。ウルトラヒーローたちが宇宙人と怪獣に立ち向かい活躍するウルトラヒーローショーを、子どもたちは夢中で応援しました。また、インタラクティブパートでは、オンラインでつながったウルトラキッズたちと、ウルトラヒーロー、特殊救難隊の隊員がウルトラマン体操を一緒に楽しみました。イベントの最後には子どもたちとウルトラマン、そして、全国の仲間たちと<ウルトラチャージ>（ウルトラヒーローショーで用いられる応援ポーズ）を贈り合い、気持ちを一つにしていました。ウルトラマンというヒーローたちとの繋がりは、病気と闘う子どもたちにとって大きな力と勇気となります。このような機会をいただき、ウルトラヒーローたち、そして「ウルトラキッズプロジェクト」に関わられたすべての方々に感謝申し上げます。

©円谷プロ

絵本読み聞かせ新プロジェクト「Disneyストーリータイム」を、日本で初めて開催

12月18日、病気と闘っている子どもたちに向けた絵本読み聞かせプロジェクト「Disneyストーリータイム」が、当センターの3つの病棟で開催されました。

このプロジェクトは、ウォルト・ディズニー・ジャパン、日本テレビ、講談社が、「物語」「読み聞かせ」「絵本」と各社が持つ強みを活かして協力体制を組み、病気と闘う子どもたちにディズニーの物語を届けることで、闘病生活の不安を和らげることや、ひと時の安らぎや楽しみを提供することを目的としています。イベント当日は、日本テレビ元アナウンサーで絵本専門士の杉上 佐智枝さんが、講談社絵本「アナと雪の女王 オラフのはじめてのクリスマス」などを披露しました。子どもたちも楽器を持ち、一緒になって音を鳴らしながら物語を楽しむなど、普段の病棟とは違った空間に笑顔があふれる時間を過ごしていました。講談社からは、読み聞かせで使われた絵本が各病棟に寄付されました。

©Disney

センターの取り組み

女性の健康総合センター〈妊娠と薬情報センター〉

妊娠と薬情報センター

妊娠と薬情報センターは2005年に当センター内に設置され、妊娠中や授乳中の薬の使用による赤ちゃんへの影響について相談を受けています。これから妊娠を考えている方や、妊娠に気がつかず薬を使用した方、授乳中にお薬を処方された方など、いろいろな状況の方から、これまでに2万件を超える相談をいただいています。

全国47都道府県60医療機関に「妊娠と薬相談外来」を設けていますので、お住まいの地域で相談することができます。

相談医薬品実績 (2005-2021年)

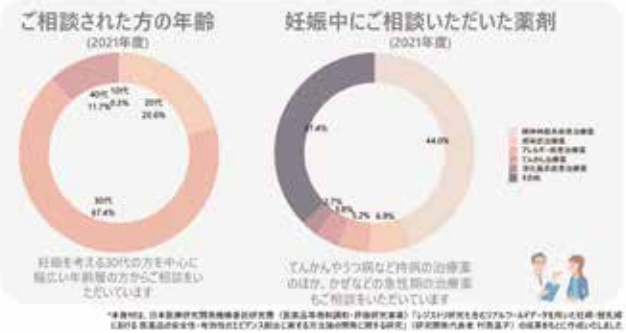
医療用医薬品 **8,594**品目　一般用医薬品 **1,502**品目

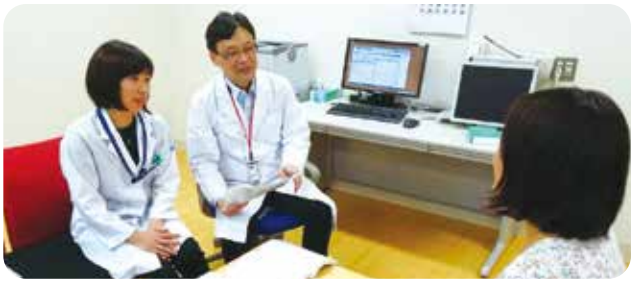
医師に処方された医療用医薬品のほか、薬局等で購入できる一般用医薬品についても相談を受けています

妊娠中の薬について知りたい方へ

妊娠と薬情報センターのウェブサイトから、相談を申し込むことができます。“かぜ”など一時的に使用した薬や、てんかんや精神疾患など定期的に使用が必要な薬など、いろいろな薬についての相談を受けています。

当センターでの相談外来は、医師、薬剤師と連携して対応します。





授乳中の薬について知りたい方へ

出産後の方を対象に、電話またはオンラインで相談を受けています。妊娠と薬情報センターのウェブサイトに、授乳と薬についての考え方や、授乳中に安全に使用できると考えられる薬の一覧表、Q&Aを記載していますので参考にしていただき、解決できない場合は、相談の予約をお願いしています。

調査へのご協力について

協力してくださる方々からの情報を集めて、妊娠中に薬を使うことが、赤ちゃんやお母さんにどのような影響を与えるかについて調査を行っています。妊娠中の薬の影響については情報が限られているため、妊婦さんの協力が必要不可欠です。妊娠中や出産後にお母さんやお子さんの様子をうかがい、情報を集めて解析することは、これから妊娠を希望されている方にとって大変貴重な情報源となります。これまでに、吐き気止めの薬や、抗生物質、痰を切りやすくする薬、気管支喘息薬、抗精神病薬などについて調査結果を解析し、相談の際に情報提供しています。

相談方法などのお問い合わせ先
妊娠と薬情報センター
03-3415-0912
(平日10:00-12:00, 13:00-16:00)

女性の健康総合センター　開所記念シンポジウムのご報告

当センターは、10月1日に、性差とライフコースに着目した女性の健康に関する医療と研究を推進する「女性の健康総合センター(Integrated Center for Women's Health: ICWH)」を開所いたしました。

それを記念し、11月17日(日)に開所記念シンポジウム「女性の健康は変わる～叡智の集結と新たな創造～」を、日本橋ライフサイエンスハブにて開催いたしました。女性の健康総合センター小宮 ひろみセンター長をはじめ、アメリカ女性の健康研究局(ORWH)局長のジャニーン・オースティン・クレイトン先生(事前収録)、日本性差医学・医療学会理事の天野 恵子先生、日本産婦人科学会理事長の加藤 聖子先生らの講演および対談が行われ、現地144名、オンライン303名の皆さまにご参加いただきました。現地・オンラインともに、医療従事者をはじめ、女性の健康に携わるさまざまな分野の方々にお集まりいただきました。会場では、シンポジウム終了後に参加者の皆さまが挨拶をかわし、活発に意見交換する様子も見られ、盛況のうちに幕を閉じました。

ご参加いただいた皆さまの声から、「女性の健康」への関心の高さや、女性の健康総合センターの今後の活動への期待を、強く感じることのできたシンポジウムとなりました。今後も、当センターの活動を報告し、女性の健康に関する知見を広める場を提供していきたいと考えています。

最後になりましたが、お忙しい中ご出席いただきました皆さまに感謝を申し上げます。今後も、皆さま一人ひとりが健やかな生活を送れるように、女性の健康支援、研究に邁進してまいります。

＊シンポジウムでの講演を当センターのYouTubeチャンネルにて限定公開しております。
ぜひ、ご視聴ください。

診療科のご案内

内分泌・代謝科

診療部長　鹿島田 健一

2024年10月に堀川 玲子先生の後任として内分泌・代謝科診療部長に就任しました。

当センターは私が小児内分泌を志した20数年前は国立小児病院で、一大学の小さな診療グループでコツコツと診療を始めた自分にとっては、仰ぎ見る巨大な存在でした。今こうして自身がその場所で仕事を始めてみると、当時自分が抱いた憧憬に近い感情と日々の現実と向き合う仕事との間の大きさを実感し、その責任の大きさに身が引き締まる思いです。

私は卒業後すぐに東京医科歯科大学（現東京科学大学）の小児科学教室（発生発達病態学教室）に所属し、そこでキャリアを積みました。基礎研究は、大学院生から海外留学（オーストラリア　クインズランド大学）、その後は大学に戻りグループの長として、多くの大学院生を指導しました。専門診療は、大学でのグループ長としての経験が大きな力となっています。一般病院の小児科での勤務では、小児科医10人以上が所属する大きな施設で部長として科を管理運営する立場にいました。当時新設の病院で、24時間365日の小児救急を標榜し、３年間で小児救急を年間1万人、入院患者数年間1,000人の施設にまで発展させました。こうした自分の幅広い経験と実績を、今後は当センターの専門診療にいかすことができればと思います。

私たちが扱う内分泌臓器は多岐にわたり、対象となる疾患は、下垂体、甲状腺、副甲状腺の異常や、骨系統疾患など広い範囲にわたります。小児領域では先天性の疾患、染色体異常や遺伝子異常による方が多いこと、また成長や二次性徴と密接に結びつくことが特徴です。また性分化疾患という性の分化が非典型的な方の診療では社会的な性の決定という特殊な医療的判断にも関わります。これらは、性分化・ジェンダーセンターとして多科、多職種連携のもと診療を行います。1型糖尿病や肥満に加え、希少な先天性代謝疾患、特に尿路回路異常や有機酸代謝異常も診療します。これらは移植外科と連携のもと、生体肝移植前後の管理、治療を併せて行います。いずれにしろ極めて高いレベルの専門性と技術を必要とする領域です。

今後、こうした専門医療はさらに複雑化し先鋭化すると同時に、幅広い社会的視野のもと遂行することが求められます。幸い当センターには国内トップと言って良い医師、スタッフがおり、赴任してまだ数ヶ月ですが、すでに多くのことを学ばせていただきました。このような恵まれた環境で仕事をさせていただける自分の幸福を噛み締めております。日本の中心としてあるべき専門診療の規範を示し、また最先端の医療を切り開き、発信することを目指し、日々弛むことなく診療、研究、教育に向き合っていく所存です。どうぞよろしくお願いします。

後列左から：杉浦 愛子、宇治田 凪紗、福井 貞弘、谷本 英里、塩田 翔吾、中川 万理恵
前列左から：内木 康博、鹿島田 健一、吉井 啓介

消化器科

診療部長　新井 勝大

消化器科では、消化器疾患の子どもたちを診療しています。身近な便秘から、膵炎、難治性の炎症性腸疾患（IBD)まで、必要に応じて多職種で連携しながら、子どもたちの将来のQOLにも配慮した質の高い診療を提供することを目指しています。

対象疾患：

IBD（クローン病、潰瘍性大腸炎、ベーチェット病、遺伝子異常に伴う炎症性腸疾患など）、好酸球性消化管疾患（食道炎、胃腸炎）、急性膵炎、慢性膵炎、乳児期下痢症、胃食道逆流症、逆流性食道炎、食道静脈瘤、機能性ディスペプシア、胃十二指腸潰瘍、ピロリ菌感染、蛋白漏出性胃腸症、過敏性腸症候群、若年性ポリープ、ポリポーシス症候群、消化管出血、便秘症、吸収不良症候群、体重増加不良など。

得意分野：

①炎症性腸疾患（IBD):日本初の小児 IBDセンターとして、世界的に患者数が増えてきている小児期発症のIBDの診療と研究に力を入れています。最近では、毎年50名以上の新しいIBD患者さんを受け入れ、診療しています。特に乳幼児期に発症するIBDの多くは、典型的な潰瘍性大腸炎やクローン病とは異なり、その病態に遺伝子の異常が大きな役割を果たしていることが明らかになってきました。そのような中、遺伝子診断を基に単一遺伝子異常に伴うIBDと診断され、骨髄移植の結果、完治に至る患者さんも出てきております。また、痔ろうや難治性の経過のために手術を要する子どもたちには、当センターの外科で手術を行うことにより、好成績をあげています。

IBDは慢性疾患として、長く付き合っていく病気であることから、子どもたち、そして家族や周囲も病気のことを理解することが大切です。必要に応じて、心理社会的なサポートを行いながら、子どもたちが素晴らしい未来を描いていけるよう、共に進んでいくことを目指しています。

②内視鏡診療：小児を対象とした内視鏡検査・治療を、年間約800件行い、正確な診断と、それに則った適切な治療を行えるよう尽力しています。小児施設としては国内屈指の検査数となります。患者さんの状態に応じて、鎮静もしくは全身麻酔を用いて、患者さんにやさしい検査を心掛けています。

研究・治験：

小児IBD領域の診断と治療、さらには生活の質（QOL）やメンタルヘルスに関連した様々な研究を、成人のIBD研究班や国内の小児IBD診療施設との連携のもとで行っています。また、消化器疾患の子どもたちに、安全で効果のある薬剤を届けるべく、治験にも積極的に取り組んでいます。

後列左から：佐藤 英里、清水 泰岳、新井 勝大、竹内 一朗
前列左から：小森園 梨奈、大植 啓史、谷岡 篤

性分化・ジェンダーセンター

性分化疾患(DSD)は、身体の性(こうした性をセックスといいます)を構成する部分(染色体、性腺、内外生殖器)のいずれか、あるいはその組み合わせが生まれつき一般的な人と異なる状態を指します。場合によって、生まれた時に外性器の形からはその場では男性女性を判別できない方もいます。そうした方は新生児期―小児期から成人期まで、多くの医療的な支援を必要とします。

性分化・ジェンダーセンターは、複数の診療科、他職種からなる医療チームで、小児期から若年成人までのDSDの方を、総合的かつ継続的に医療的立場より支援し、そのために必要な医療を提供します。また研究所や遺伝診療センターと連携して、DSDの原因解明や診断法開発を目指した研究も併せて行います。

上のお子さんの立会い分娩が始まりました

当センター産科では、2024年年4月15日からLDRで上のお子さんの分娩立会いが可能になりました。上のお子さんの人数・年齢の制限はございませんが、事前に上のお子さんの予防接種歴の確認が必要です。

上のお子さんの立会い分娩をきっかけに、ご家族みんなで赤ちゃんを迎える準備をしていただければと思います。

お子さんの立会い分娩を希望される場合は、こちらのQRコードより動画をご視聴ください。

NICU同窓会＆せいいくあかちゃんの日　開催

11月2日に第3回国立成育医療研究センターNICU同窓会を病院講堂で開催しました。30家族約100人のNICU卒業生とそのご家族が参加してくださいました。保育器や500g、1,000gの赤ちゃんの「大きさ」や「重さ」を体感できるコーナーでは「懐かしい」という声が聞かれました。また森井 奈緒さんによるミニコンサート、NICU看護師によるダンスやぶらんこ、トランポリンなどで楽しみました。

当院のNICUでは早産以外の様々な病気を持つお子さんもたくさん入院されています。世界早産児デーである11月17日は「せいいくあかちゃんの日」としてNICUに入院するすべてのお子さんを応援する日としています。それに合わせて11月には病院1階でNICU卒業生の写真展を開催しました。多くの方にNICUで頑張るお子さんとご家族を知っていただき、応援していただけますと幸いです。

行政施策の理解につなげるために

小児慢性特定疾病情報室　盛一 享徳

小児慢性特定疾病情報室は、慢性疾病を抱える子どもたちへの国の支援施策である小児慢性特定疾病対策の運用支援や疾病情報の登録、そして政策に関わる疫学研究などを行っています。

年間10万件以上の登録がある小児慢性特定疾病の疾病情報が書かれた医療意見書（専用の医師の診断書）のデータベース化に加え、下記3つのウェブサイトの運営も行っています。

①小児慢性疾病に関する情報の周知を目的としたポータルウェブサイト「小児慢性特定疾病清報センター」（https://www.shouman.jp/）。

②小児慢性特定疾病指定医のための研修サイト（https://www.sdtweb.jp/）。

③難しい医療費助成の仕組みをかみ砕いて紹介する「ちょっと教えて！小児慢性特定疾病のための医療費助成制度～難しい病気を抱えるお子さんとそのご家族へ～」（https://kodomo.kouhi.jp/）。

③のサイトは、理解が難しい行政施策を、動物の親子が会話をするイラストを用いることで、制度のポイントを理解しやすくする工夫をしています。これからも当該制度に関する国民の理解と慢性疾病を抱える子どもたちのアウトカムや社会参加の向上にむけて、関係者とともに努力を続けていきたいと思います。

臨床研究センター

「臨床研究実践セミナー」生物統計ハンズオン：傾向スコア解析（入門編）

臨床研究センターでは、2025年2月11日（火・祝）に「臨床研究実践セミナー」生物統計ハンズオン：傾向スコア解析（入門編）を開催いたします。傾向スコア解析を学んでみたいものの、どこから手を付けてよいか分からないという初学者を対象に、傾向スコアの計算の概要から理論的背景、フリーの統計解析ソフト「EZR」を用いた傾向スコア解析の簡単な実践まで、基礎的な内容を中心に解説します。

開催詳細や申し込み方法につきましては、下記QRコードよりご参照ください。

【詳細はこちら】

【プログラム】　2025年2月11日（火・祝）

時間	内容	担当者
13:00～15:00	セミナー：傾向スコア解析（理論編）、傾向スコア解析（実践編）	三上 礼子、朴 慶純
15:00～15:45	懇談会（自由参加）：日頃の臨床研究や統計解析に関するお悩みや質問などございましたら講師やファシリテーターにご相談いただけます。	三上 礼子、朴 慶純、岩元 晋太郎、桐野 浩輔

【会　　場】ＡＰ品川（東京都港区港南1丁目6−31 品川東急ビル 8階
【参　　加】参加には、お申し込みが必要です。詳細ページからお願いします。（締切2025年2月4日）
【定　　員】先着40名
【受 講 料】成育職員　1,000円、外部職員　3,000円
【担当部署】病院　臨床研究センター　データサイエンス部門　生物統計ユニット

イルミネーション

当センターでは毎年11月下旬～1月末にかけて、外に出ることができない入院患者さんに少しでも季節を感じてもらおうと、病棟からも見える中庭でクリスマスイルミネーションを行っています。今年もサンタクロースや雪だるま、トナカイやクマなどの動物や大きな馬車など、さまざまなオブジェを置いたり、研究所の壁面をつかったイルミネーションのクリスマスツリーを設置しました。入院患者さんや外来患者さん、お見舞いに来られたご家族だけではなく、医療従事者や地域の方々の心も温め、ひとときの癒しに繋がっています。

各所連絡先

患者ご家族からのご予約	予約センター	〈直通〉03-5494-7300（月～金 9:00 ～ 17:00）

●医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ

救急の場合	救急センター	〈代表〉03-3416-0181（24時間受付）
小児集中治療室（PICU）への転送・搬送	03-5494-7073	小児救急搬送チームにつながります
新生児集中治療室（NICU）への転送・搬送	03-3416-0181	NICUにつなぐように伝えてください
母体搬送	03-3416-0181	母体搬送担当の医師につなぐように伝えてください
早期に診療が必要な場合 セカンドオピニオン外来 医療機器の共同利用（放射診断部）	医療連携室	〈直通〉03-5494-5486（月～金 8:30 ～ 16:30）

アイノカタチ基金

子どもたちの命を守るための医療機器の整備や、療育環境の改善のためにご寄付をいただけるとありがたく存じます。当センターへの寄付は税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。詳細はHPをご覧ください。
https://www.ncchd.go.jp/donation/application.html

国立成育医療研究センター 広報 SNS National Center for Child Health and Development

国立成育医療研究センターや、成育医療に関する様々な情報を投稿しています。
ぜひ、フォローしてくださいね。

YouTube

@ncchd_pr
https://twitter.com/ncchd_pr

発行：国立成育医療研究センター　理事長　五十嵐 隆
編集：企画戦略局広報企画室
〒157-8535 東京都世田谷区大蔵 2-10-1　電話：03-3416-0181　FAX：03-3416-2222

2025.1.20 発行 Vol.41 冬号